注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ソードアート・オンライン―Ｔｈｅ　ｓｃａｒｌｅｔ　ｐｒｉｎｃｅｓｓ―

【作者名】
糸田シエン

【あらすじ】
デスゲームと化したＳＡＯの中で、《真紅の姫君（スカーレット）》と呼ばれた少女と、《ポーションの魔術師》と呼ばれた少年との夫婦の物語。

基本原作沿い、オリエピではオリキャラ同士がイチャイチャしてるだけの可能性高し。
さらには若干チート性能あり。原作キャラも性格とか違う可能性あり。それでもおｋな方はどうぞ。

作者の妄想を垂れ流した作品ですので、不明な点などありましたらご指摘下さい。

始まりの日

わたしは久々に学校に足を踏み入れていた。昨日の昼過ぎに日本に帰ってきて、お世話になった関係者のところに挨拶回りに行って、家に帰ると倒れ込むように眠ったのを覚えている。今日は学校もないので、昼まで寝て朝昼兼用のごはんを食べてゲームをしようと思っていたのだが、その計画もお母さんによって阻止されてしまった。

正直まだ時差ボケが治っていない。そのため物凄く眠い。行っていたのが日本よりも北だったのもあってか、十一月の寒さも眠気覚ましにすらならない。

それでもわたしが学校に来たのは、お母さんに無理矢理起こされて放り出されたからだ。曰く、「学校で先生たちが待ってるから」と。たぶんお母さんが連絡入れたんだろうと思いつつも、そう言われてしまっては行かないと先生方に申し訳ないので、まだ本調子でない体を二十分引きずって来たわけだが。校門をくぐると、普段と変わらない両の車やバイクなどが並んでいる。まさかの全員集合ですか、と気が重くなり溜め息をつくわたしの元へと誰かが走ってくる。それが幼馴染みの秋穂であると気付くのはすぐだった。

秋穂はわたしの手前で立ち止まると、息を整えて言った。

「お帰り。もう、帰って来たなら連絡してよ」

「ゴメンネ。昨日の昼過ぎには帰ってきてたんだけど、挨拶回りして家に着いたらすぐ寝ちゃって。それに、今も時差ボケで眠いし、日本は暑いし……」

家に帰って寝たい、という言葉は飲み込んだ。それを言ってしまうと、わざわざ会いに来てくれた幼馴染みに悪いから。

「秋穂、部活ないの？」

「んにゃ、これから」

彼女が所属するのは陸上部だ。県大会に出場するくらいは速いらしい。

「そう言えばさ、今日が正式サービス開始日だよね、ＳＡＯ」

ソードアート・オンライン。それは五感すべてをシュミレートした、世界初のＶＲＭＭＯＲＰＧのゲームタイトルである。初回生産はわずか一万本。そのゲームを買うために一番乗りした人は一週間も並んだらしい。

「あたしも買いに行こうかと思ったんだけど、親に反対されちゃってさー、買いに行けなかったのよね」

残念そうに言う秋穂を眺めて、わたしは自慢気に鼻を鳴らし、言う。

「わたし、持ってるよー」

初めはポカンとしていた秋穂だったが、やがて鬼でもビビりそうな勢いで問い詰められた。

「ちょっと、どういうこと!?」

両肩をがっちりと掴まれて、ゆっさゆっさと振られる。

「話すっ、話すから放してよぉ！」

ようやく解放されて、乱れた制服を軽く整えてから話し始める。

「お兄ちゃんがね、わたしが世界大会で優勝したらなんでも買ってやる！　って言ってくれてさ。それでＳＡＯがいいって言ったの」

抱きついて「お兄ちゃん大好き」って言ったらイチコロだった。すぐに家を飛び出して、店に並んでいた。恥ずかしながら、さっき言っていた一番乗りした人はわたしのお兄ちゃんだ。歳は六離れている。わたしが中三なので、お兄ちゃんは今大学三回生だ。朝のニュース番組で一番乗りとしてインタビューも受けたらしい。聞いた話によると、妹のために買いに来ただの、大好きと言われては断れないだの、世界大会で優勝したらプレゼントするだの、色々と喋っていたらしい。困るのは、全て真実なことだ。弁解しようにも出来ない。

そのニュースを見ていたネットの住人によってわたしの個人情報が探し当てられたのはその日の昼前のことだという。いくらなんでも早すぎでしょう。

日本中に我が兄のシスコンっぷりが知られてしまったわけだが、もちろんそれに留まるハズもなく、シスコンの兄と世界一のブラコン妹という不本意な認識が世間に定着してしまったわけだが、一つだけ声を大にして反論したいことがある。わたしは断じてブラコンではな

いということを。
「まぁ、あの人ならやるわよね。てかテレビに出てたわねそう言えば」
少なくともこの学校ではお兄ちゃんがシスコンであることは周知の事実だ。幼馴染みの秋穂はもっと生々しいところまで見ている。
ここでわたしのお兄ちゃんがどれだけ変態（シスコン）であるかを示すエピソードを紹介しよう。お兄ちゃんはわたしのイベントには必ず顔をだし、その度にわたしの写真を百枚以上撮っていく。去年の体育祭の時、その姿があまりに危険に見えたのか、近くの保護者の連絡によって体格のいい体育教師に両脇を抱えられてつまみ出されるということがあったのだが、その時わたしの名前を泣きながら叫び続けていた。このことが原因で、わたしの兄＝シスコンという等式が成り立ってしまったわけだ。
あの時はわたしも「さすがにないわー」と思ったものの、それだけ大切に思ってくれているんだと思うと、どうしても嫌いになれなかった。ちなみに秋穂なら一発殴って即行で家出するとのことだ。
「わたし、そろそろ職員室行かないと。先生たち待ってる。それに、秋穂も部活でしょ？」
「あ、ごめん引き止めちゃって。また今度ＳＡＯの感想聞かせてね、リエ」
秋穂と別れて職員室へと向かう。ノックをして「失礼します」と言ってから扉を開けると同時に、パパパパーン、とクラッカーが弾けた。
「せーのっ！」
『世界大会、優勝おめでとう！』
拍手喝采に包まれる。そして目の前の机に、同じく優勝おめでとう！と書かれたホールケーキが鎮座していた。
「あ、ありがとうございます」
これはしばらく帰れそうにないな、とサービス開始と同時にログインすることを諦めた。
職員室には十人以上も先生たちがいて、何人かはビール缶を片手に持っている。アットホームな人たちだなぁ、とわたしは漠然と思っ

た。
ケーキを食べたり話をしたりしている内に時間は午前十一時半を跨ごうとしていた。そんな時だった。教頭が祝勝会をお開きにしてくれたのだ。この時ばかりは、教頭を拝みたくなった。
最後に先生たちにお礼を言って、わたしは早足に帰宅する。部屋着であるシンプルなTシャツと短パンに着替えて、すぐにお昼ご飯を食べる。
自室に戻って、ナーヴギアとSAOのマニュアルを読み込む。読破して、ナーヴギアの初期設定に移る。そして、いよいよかと心を踊らせながら、わたしは魔法の言葉を呟いた。
「リンクスタート！」
次はキャラメイキングだ。
リアルの自分は慎重が低く、顔も童顔で、最悪小学生と間違えられる。最近の小学生は発育が良すぎるとぼやいても何も変わらないだろう。女性は若く見られたいと皆が言うが、わたしとしては子供扱いされるのは大嫌いだ。なので、見た目だけでも変えたかった。身長は少し高めに。グラマーではなくスレンダーな感じで。顔も大人な感じ（あくまでわたしの主観でだが）にメイク。
ようやくキャラを作ってログインしたのは午後三時を回ってからだった。
いざログインしてみると、街は既に活気に溢れている。やはりほとんどのプレイヤーがサービス開始と共にログインしていたのだろう。
「うわぁ……」
思わず感嘆が溢れる。腕を回したり、歩いてみたりして体の感覚を確かめる。ほとんど現実の体の感覚に近い。武者震いがする。
そうだ、わたしはこれを待ち望んでいた。わたしが求めているのは、純粋に強者との戦い。そして、最終的には"最強"の称号を手に入れる。これがわたしがSAOを始めた理由。ゲーム内での生活なんて二の次だと思っている。無論、料理スキルだけは絶対取得するつもりでいるが。
まずは街の散策から始めようと思い、わたしは足を進めた。

街の散策を終え、安値で武器を買えるショップを見つけた時は、少なからずテンションが上がったりした。わたしのストレージには、初期装備のショートソードではなくスチールスピアなるものが収まっている。リアルでも扱ったことがあるので選択した。
スキルスロットには現在片手用長槍と索敵を入れてある。そして、いざフィールドに出ようと思った時だった。

――ゴーン、ゴーン、ゴーン。

どこからともなく聞こえてきた鐘の音。やがて、体が青い光に包まれる。視界も光に覆われ、ようやく視界が開けた場所は、広場だった。強制転移でもさせられたのだろう。そして広場には恐らく全プレイヤーがいる。彼らは口々に「なんでログアウト出来ねぇんだよ!?」とか「GM返事しろよ！」とか叫んでいる。
「……ログアウト出来ない？」
メニューウィンドウを開き、オプションを押す。確かに、そこにはログアウトボタンが存在しなかった。
いや、よく考えればわたしがこの世界に来た理由とはあまり関わりがないのでは？　と一瞬血迷った考えが頭をよぎるが、全くよくない。
夕刻の空が赤に染まる。それは大量の《Ｗａｒｎｉｎｇ!!》表示だった。その隙間からドロリとした液体が垂れ落ちて来て、やがて形になる。赤のローブを身に纏った、空虚の巨人。その巨人は、無情なる宣告を始めた。
『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』
こうして、ソードアート・オンラインという名のデスゲームが幕を開けた。

＊

チュートリアルが終わった。皆一様にパニックを起こしている。

デスゲーム宣言と同時に、アバターの姿が変わってしまったのだ。他でもない、現実の姿に。作り上げたスレンダーな大人の女性は一欠片も残っておらず、もうポリゴンになってしまった手鏡に写っていたのは、大きくてくりくりした黒い瞳。子供っぽさ全開の幼い顔つき。赤紫色をしていたロングの髪は濃い茶色のショートカットに。視線も低くなり、胸も……少し小さくなった。

しかし、過ぎたことを悔やんだりしても何も始まらない。だからこそ、次の行動（アクション）が必要なのだ。

とりあえず広場を脱出し、辺りを見渡す。同じく広場を出た人が数人いるようで、わたしはそこに向かって歩く。

わたしが決断したのは、当初の目的を果たすことだった。つまり、

「ねぇ、そこなあなた。わたしと決闘（デュエル）しましょう？」

対人戦を申し込むことだった。当然のように断られ、罵倒されながらも決闘申請を行ったりしたけどダメだった。途中から声をかけるのと同時に申請してみたりしたが、全く相手にされない。後から考えてみたら当然の結果だ。

仕方なくフィールドに出たのは日が落ちてからであり、視界は不明瞭だが索敵スキルのおかげでモンスターの位置は分かるので問題ない。視界に入る全てのモンスターを倒しながら進む。森に着く頃にはレベルも上がり、筋力値寄りにポイントを振る。

森の中は静かだった。いや、索敵スキルが警告を鳴らしている。

「囲まれたかな」

現在のレベルではこの状況を打開することは敵わないかもしれない。それでも、この状況を楽しみたいと言う自分がいる。五対一。相手は狼型のモンスター。

槍を握り直す。ここは積極的に攻めるべきだと判断し、他の固体と少し距離が離れている固体に狙いを定め、地面を蹴る。通常攻撃でＨＰを半分まで減らし、ソードスキルでクリティカルを狙いトドメを刺す。残り四体。

一体倒したためか、タゲが完全にわたしに向き、一斉に襲い掛かってくる。

直線で来るので動きが読みやすく、避けるのはそう難しくない。隙を見ては攻撃、回避を繰り返す。余裕があればソードスキルも使い、狼のＨＰを大きく削る。

愉しい。命がかかっているのは百も承知だが、それでもわたしはこの状況を愉しまずにはいられなかった。

最後の一体をポリゴンに変えて、武器を仕舞って初めて、そこに目撃者がいたことに気付く。

短髪爽やかイケメンタイプの少し歳上そうな少年で、割とわたしの好みだったりする。

とりあえずわたしは、何十回と繰り返した言葉と操作を行う。

「ねぇ、そこなあなた。わたしと決闘（デュエル）しましょう？」

今頃彼の目の前に申請が届いているハズだ。そんな彼の名前は……《ｖｅｌｌｃａ》。これはヴェルカと読むのだろうか。武器はおそらく短剣だろう。

一度驚いたような顔をしながらも、彼はすぐに申請を受け入れた。

カウントが始まる。初めての対人戦に、わたしは昂りを抑えきれずに武器を構える。対してヴェルカも武器を構える。互いに視線を反らさずカウントがゼロになるのを待つ。

いや、わたしは別の意味で彼の顔に釘付けになっていた。その真剣な眼差しに……わたしは、一目惚れしてしまったようだ。ずきゅーん。

始まりの日②

突然だが、現状を理解するために説明させてもらいたい。

俺にはβテスターの親友がいた。俺は当然のように羨ましがったが、彼は数日でプレイを止めてしまった。理由はフルダイブ不適合。彼の場合平衡感覚に支障を来すらしく、フルダイブ酔いが酷かったらしい。ログアウト直後に吐いたのを最後に、もうフルダイブを止めてしまった。

俺はＳＡＯを買うために数日間並ぶ決意をしていたわけだが、彼がβテスターの特権である、製品版優先購入権を使って手に入れてくれたのだ。

そしてデスゲーム開始宣言の後、夜になってようやく次の村に進む決心をした俺だが、森に入ると一人の少女が狼四体と乱戦しいているのを見つけた。その少女はとても可愛らしい顔立ちをし、背も百五十センチ程度と小柄。ショートの髪を揺らして槍を振るう様は、なんというか、とても愉しそうだった。

戦闘が終わって俺に気付いた少女は、何を思ったのかいきなり決闘を申し込んできた。仕方なくそれを受ければ、今度はいきなり抱きつかれた。意味がわからない。

「ちょっと、なんで抱きついてるんだ？」

今の疑問を率直にぶつける。

「好きだから。愛情表現」

少女の力が少し強まる。多分彼女の方が筋力値が高い。俊敏値高めの俺は振り払うことが出来ない。いや、目の前に現れている《ハラスメント防止コード》を使えば一発なんだけど、どうにも使う気になれない。

「えと、ヴェルカ、でいいんだよね？」

ヴェルカというのは俺のキャラクターネームだ。

「あぁ。そういう君は……」

決闘を申し込まれた時に出たウィンドウで見た時に見た名前は《Ｍ

ｅｌｔａ》だった。正直読み方が分からない。一番有力なのは《メルタ》だが、間違うのも失礼なので言い出せないでいた。
「わたし、メルトアっていうの。ちょっと強引だけど」
なるほど。溶かす（ｍｅｌｔ）にａを付けて造語的につけたのだろう。
「で、メルトア。好きってどういう意味だ？」
「一目惚れしました。付き合って下さい」
正直、俺のタイプではない。グラマーな大人の女性が好みの俺にとって、目の前のロリロリした少女は恋愛対象ではないのだ。いや、だからといって抱き着かれて嫌な気分はしない。可愛い子には間違いないし、そんな子に惚れられたこと事態は誇ってもいいハズだ。でも俺はロリコンではないのだ。しかし、なんだろう。目の前の少女を見ているとものすごく保護したくなるのは気のせいだろうか。小動物のように保護欲を掻き立てられる。このまま抱き締めてしまいたい衝動にもかられる。よく考えたら子供は好きだし、グラマーな体型というのはただ単に体だけが目当てだったのではないだろうか。うん、前言撤回。俺はロリコンだ。故に目の前の少女の告白を断る理由はない。
「いいよ」
答えると、少女、メルトアは小さくガッツポーズをした。
「メルトア、そろそろ次の村に行かないか？」
「んー、なんか味気ないなぁ。愛称決めない？　あなたはヴェルね」
愛称……というよりただ省略しただけな気もするが。俺も彼女のスタイルに乗っかることにしよう。
「じゃあメル。次の村に行こう」
言って、俺は辺りを見渡す。さすがに誰かに見られるのは恥ずかしい。それに、友達が絶対に気を付けろと言っていたプレイヤーがいるからだ。
「どうしたの？」
メルが首を傾げて聞いてくる。
「いや、βテスターの友達がさ、情報屋には気を付けろって言ってて

さ」
　確かアルゴという名のプレイヤーだったハズ。
「それはオレっちの事かナ？」
「うぉおう!?」
　突然現れたプレイヤーに驚いて、飛び上がる。
「うわぁ、可愛いおヒゲ」
　メルがアルゴの頬をつつく。
「止めないカ」
　メルの手を振り払って、アルゴは訊ねてくる。
「そのβテスターの友達のプレイヤーネームを教えてくれないカ？」
「いや、製品版はプレイしていない。フルダイブ酔いが酷いらしくてな」
「アァ、そう言えばいたなそんな奴」
「おヒゲ～♪」
「止めないカ」
　口では言いつつも、アルゴは半ば諦めてしまったようで、されるがままだ。
「で、どうしてβテスターを探してるんだ？」
「攻略本を買ってもらおうかと思ってナ」
「攻略本？」
　言うと、アルゴは一冊の本をオブジェクト化した。
「これダ。ビギナーにコレを無料配布するための資金集めしてるんダヨ」
「なるほど。俺も一口買わせてもらおうかな」
「わたしも」
　するとアルゴは少し考えて、言う。
「いや、ビギナーの二人からは気持ちだけ貰っとくヨ」
　攻略本を渡すと、アルゴは去っていった。こんな言葉を残して。
「アインクラッド初のカップル成立おめでとウ！　オネーサン、二人の恋路を応援するヨ！」
　ニャハハハハ！　と個性的な笑い声が遠ざかっていく。

「すごいよ！　初の夫婦だってさ！」
「待て、かっ飛ばし過ぎだ。夫婦とは言ってなかったぞ」
「あれ？　そうだったっけ？」
顎に指を添えて首を傾げるその姿に、俺は衝動を抑えきれなかった。力ずくで彼女を抱き寄せ、唇を奪う。
「……ぷはっ。もぅ、いきなり過ぎるよ」
「悪い……」
見つめ合って、今度はどちらともなく唇を重ねる。
「ヒューヒュー！　お熱いネ、お二人サン！」
いつの間にかアルゴがいた。いや、もしかすると隠れていただけかもしれないが。
「いいネタどうモ。売れたら報告するヨ！」
「待てコルァ！」
追いかける……が、全く捕まえられない。俊敏値を高めに振っている俺でも追い付けないとなると、筋力値振りであろうメルでは到底追い付けない。
数分間追いかけて、膝に手をつき呼吸を整える。
「鬼ごっこは終わりかナ？」
再び追いかけようかと身を落とした時に、俺の横を何かが通り過ぎていった。それもかなりのスピードで。
見ると、メルが槍でアルゴのフードを木に縫い付けていた。後から聞いた話では、震脚からの突き、だそうだ。
「もし売ったら……分かるよね？」
金棒を持った鬼ですら逃げ出してしまいそうな気迫が、今のメルにはある。アルゴは、目尻を光らせながら細かく頷いている。そして俺は認識する。彼女を怒らせてはいけない、と。

第一層攻略会議

デスゲーム開始から約一ヶ月。未だ第一層はクリアされていない。それでもわたしは幸せだ。何故なら、大好きな人が隣にいるから。

敵を見付けては突っ込んで片っ端から皆殺しにするというのを繰り返していたからか、わたし達のレベルは十を越えていた。わたしが十二で、ヴェルが十一。

新しく増えたスキルスロットに、わたしは武器防御と軽金属装備を入れたのだが、ヴェルは今も何を入れるか迷っているらしく、空いたままになっている。

「今日の十六時からだったよね。攻略会議」

さっき迷宮で会った黒ずくめの片手剣士が教えてくれたのだ。わたし達はもうトールバーナに向かっているが、彼はもう少し狩ると言っていた。

「あぁ。ついにボス戦か」

お互い自分の装備を確かめる。わたしの槍は始まりの街で買った物から更新されている。迷宮の宝箱から、いい武器が出たのだ。恐らくこの層には二つとない、現時点で最も強い槍だと確信している。ヴェルの武器も、モンスタードロップ品に持ち変えられている。

「そういえば、ポーション作製スキルってのがあるらしいよ」

わたしが記憶の端にあった言葉をなんとなしに言うと、ヴェルがしばし黙考する。

「ポーション作製スキルか……」

呟いて、ウィンドウを開いて誰かにメッセージを送った。

「誰に送ったの？」

「アルゴ。ポーション作製スキルについて教えてもらおうと思って」

するとすぐ返信が来たらしい。

「トールバーナの東の酒場で待ってるってよ」

ヴェルの言葉に頷いて、手を繋いで歩く。

酒場に着くと、アルゴはすでに座って待っていた。

「待たせたな」
「待ち時間中の飲み物代は払って貰うゾ。で、今日はなんの情報が欲しいんダ？」
　アルゴの向かいに座る。
「ポーション作製スキルについて教えて欲しい」
　ヴェルがウィンドウを操作する。アルゴの前にトレードウィンドウが現れる。中身は千コルだ。
「うム、確かニ。でも、あんまりオススメはしないナ」
「理由は？」
「もう五層も進めば、即効性のある結晶アイテムが売りに出されるからダ。結晶アイテムっていうのはアインクラッドに唯一残る魔法の残り香なのサ。だから、ベータの時もポーション作製スキルは死にスキルになったんだヨ」
　それならポーション作製スキルなんて取らずに、もっと役に立つ戦闘スキルを取った方がいいのでは、とわたしが言おうとしたところで、ヴェルが口を開いた。
「よし、俺やっぱりポーション作製スキル取るわ」
「オレっちの話聞いてたカ!?」
　アルゴが叫ぶなんて珍しい。たぶんアルゴが叫んでいなかったらわたしが叫んでいた。
「ヴェル、何か考えがあるんだよね？」
「当然」
　するとヴェルは説明を始める。
「例えばさ、ＲＰＧでモンスターのほとんどが魔法に弱かったら、皆魔法要員を育てるだろ？
　それさえ育てれば余裕で攻略出来ていくからな。けど、それじゃつまらない。あ、つまらないってのはあくまで制作側話な。だからこそ、その手のＲＰＧにはたまに魔法耐性が無駄に高いボスがいる。全体的に育てていかないとクリア出来ない仕様にするためだな。でないと剣士キャラが発狂しちまう。……えと、つまりだな。それはこのＳＡＯでも同じじゃないかってことだ」

「……もしかすると結晶アイテムが使えないボスが現れるかもしれない、ト？」
「そゆこと」
　ヴェルは予想しているのだ。まだ見ぬ結晶アイテムが使えない時に再び日の目を見るポーションのことを。
「でも、それはラスボス近くになってからじゃないのカ？」
「おいおい。だからこそ今取るんじゃねぇか」
　この時ばかりは、ヴェルが普段よりカッコよく見えた。
「なるほど、一本取られたヨ。ご褒美に一回だけ情報料をタダにしてあげよウ」
「それはまた今度使うことにしよう。ところでポーションって現地調合とか出来るのか？」
「アァ。材料の分ストレージが埋まるがナ。取得するならこの街の薬剤師の所に行くとイイ。一時間で取得と同時に熟練度も手に入ル」
「んじゃ今から行ってくるわ」
　今が十三時なので、時間は余裕なハズだ。
　ヴェルが立ち上がるのを見て、わたしはヴェルに言う。
「わたしもうちょっとアルゴと話したいから、悪いけど一人で行ってもらってもいいかな？」
「あぁ。すぐ戻ってくるよ」
　酒場から出ていくヴェルの背中を見送ってから、わたしはアルゴに話しかける。
「で、依頼してた件はどうだった？」
「強い奴を教えて欲しいってやつカ。残念だが、自分の手の内を明かす馬鹿はいないヨ。なんなら今日の攻略会議で探してみたらどうダ？」
　なるほど、その手があったか。とりあえず、アルゴに感謝を伝えねば。
「さすがアルゴ！　大好き！」
「抱き着くナ！　てか筋力値高くて逃げられなイ!?」
　当然だ。俊敏値極振りのアルゴでは筋力値振りのわたしを振りほ

どく事は出来ない。
「……どういう状況だ、コレ」
その声の人物に、アルゴは叫んだ。
「いいところに来たなキー坊！　この女を引き離してくレ！」
見ると、その人物は黒ずくめの片手剣士だった。
アルゴはその人物の助けを借りてわたしから離れると、その人物の背中の後ろに隠れてしまった。
「えと、アンタ確かさっき迷宮で会ったよな」
「攻略会議のこと教えてくれたよね。ありがとう。わたしはメルトア。さっき一緒にいたのがヴェルカ」
「俺はキリトだ」
わたしはキリトを見る。女顔で、線の細い体をしている。外見はそう強そうには見えない。しかし、この世界の強さというのはレベルとプレイヤーの技術に比例する。キリトは、その両方においてわたしを上回っているような気がする。
「ねぇ、キリト」
わたしはヴェルと会って以来していなかった操作と共に、あの言葉を発した。
「わたしと決闘（デュエル）しましょう?」
目の前に現れたウィンドウに、キリトは驚いたような顔をしてから、「外に出よう」と言った。
外に出てからキリトがウィンドウを操作する。
《Ｋｉｒｉｔｏ　が初撃決着モードを選択しました》
カウントダウンが始まる。キリトが剣を抜く。わたしも槍を握る。
お互い相手に初手を悟られないよう構えている。やはりキリトは戦い慣れている。
カウントがゼロになる。
わたしは震脚で距離を詰め、勢いのまま槍を放つ。が、それは弾かれてしまう。《武器防御》の基本技、パリングだ。
驚くべきなのはキリトの反応速度だ。ヴェルやアルゴでは反応すら出来ない一撃に、反応するどころか完全に見切っていた。

結果から言うと、わたしが負けた。わたしのＨＰが先にイエローへと割り込んでしまったのだ。
わたしの強さは現実でも通用する。だが、キリトの強さはゲームの中だけのものだろう。いや、だからこそわたしは負けたのかもしれない。
「いい勝負だったよ」
「ううん。わたしの完敗」
恐らく、これから先もキリトには勝てないだろう。そんな意味を込めて、完敗という表現を選んだわけだ。
「一つ聞きたいことがあるんだけど。最初のアレ、震脚か？」
「よく知ってるね」
「あぁ。昔のアニメで外道神父が使ってるの見たことあったからな。いや、まさか本当にあんなこと出来る奴がいるとは思わなかったが……」
まぁ、実際八極拳をそこまで鍛えている人も少ないのだろう。わたしも世界大会を優勝できたのは八極拳のおかげだと思っている。
「わたし、ちょっと宿に戻る。ありがと」
わたしは逃げるように宿へと帰った。とりあえずヴェルに宿にいるとメッセージを飛ばして、部屋着へと着替えて俯せにベッドに倒れ込んだ。
負けたのは本当に久しぶりだ。最後に負けたのは、いつだっただろうか。思い出すことさえ出来ない。いつからか勝つことが当たり前になっていた。敗北の感情というものを忘れていた。
それから四十分ほどして、ヴェルが帰ってきた。
「ただいま。……どうしたメル。元気ないけど、何かあったのか？」
「うん。決闘で負けちゃった」
「決闘⁉　それに負けた⁉」
ヴェルが驚くのも無理はない。わたしの強さは、一月共にいて分かっているのだから。
「うん。相手は攻略会議のこと教えてくれた人」
「あぁ。アイツか。あの黒い奴」

ヴェルと話していて、我慢していたものが決壊する。
「ヴェル……悔しい、悔しいよぉ」
涙を見られるのが恥ずかしくて、枕に顔を埋める。
するとヴェルはベッドに腰掛け、優しくわたしの頭を撫でてくる。
「大丈夫。メルならその悔しさも乗り越えられる」
キリトに勝てると言わない辺り、彼なりの優しさなのだろう。
嗚咽で震える肩にヴェルの手が触れる。
落ち着くまでに数分かかり、落ち着いてからも元気が出ない。なので、わたしはベッドに腰掛けるヴェルの背中から抱き着く。
「しばらくこのままでいさせて」
数分の後、充電が完了する。
「うん、もう大丈夫。ありがと。着替えるから向こう向いてて」
ヴェルがこちらを見ていないことを確認してから、戦闘装備に着替える。
二人で宿を出て、会議の場所に向かう。まだ少し時間に余裕があるハズなのだが、すでに人が集まり始めていた。
わたし達はボウルを真っ二つにしたような野外劇場の、舞台から見て右の上の方に座った。
開始の時刻にもなると、フルレイド……には少し足りないが、それに近い人数が集まっている。
「皆！　今日は俺の呼び掛けで集まってくれてありがとう！　俺はディアベル。職業は気分的に……騎士（ナイト）やってます」
周囲から「本当は勇者って言いたいんだろ！」とか野次が飛んだりして、笑いが起きている。ディアベルは青い髪に、かなり顔もいい。まぁ、ヴェルの方がカッコイイが。
「実は今日、俺達のパーティがボス部屋の扉を発見した！」
ざわめきが起こる。
「ちょっとええかナイトはん。一つだけ言いたいことがあるんや」
立ち上がって舞台に降りた男は、なんというか……奇抜な髪型をしていた。どこかで見たことがあるのだが、どうにも思い出せない。うぅ、もやもやする……そうだ、確かもやもやしたときに投げたくな

るボールだった気がする。
「発言は大歓迎さ。けど、その前に名乗ってからにしてもらおうかな」
ディアベルの言葉に、「フン」と返して、男は言った。
「わいはキバオウってもんや。わいが言いたいのはただ一つ。元βテスターの卑怯者ども！　出てこい！」
その後の言葉を要約すると、βテスターが見捨てたせいで死んでいったビギナーへの償いのために、コルとアイテムを全て出せ、とアホみたいなことを大声で叫んだのだ。
「馬鹿じゃないの」
思わず溢れた言葉は、キバオウに届いていたらしく、さらに付け加えたように叫び始めた。
「それにイチャコラしとる奴らもおるしなぁ！　わいらは真剣に攻略しようとしとるんや！　遊びに来とる奴らはさっさと帰れ！」
明らかに私たちを見て言っている。その言葉の中に、どうしても許せない部分があった。別にわたしが罵られるのはいい。馬鹿にされるのもいい。でも、ヴェルまで言われたことが、わたしにはどうしても許せなかった。
ヴェルの制止を振り切って、わたしはキバオウの正面に立つ。
「取り消せよ」
「あん？」
「取り消せっつったんだよ聞こえなかったのかも〇っとボール！」
一気に空気が凍りつく。
「なんやとガキ！　もういっぺん言ってみい！　それに目障りやから言っとんねん！　お前らが視界に入るだけでわいらの士気が下がるんや！」
まただ。またヴェルを含めた。
「ま、まぁまぁ落ち着いて。それにアナタも、何を取り消して欲しいんだい？」
ディアベルが優しく諭すように言ってくる。さすがに答えないわけにもいかないので、わたしは答える。
「わたしのことを悪く言うのは構わない。けど、ヴェルのことを悪く

言ったことだけは取り消して」
　出来るだけ怒りを押さえ込んで、答えた。
「知るかんなもん！　さっさと帰れ！」
　キバオウが剣を抜き、そのつっ先をわたしに向けてくる。
「落ち着いて」
　ディアベルがキバオウを必死に抑えている。が、わたしも槍を持って臨戦体勢に入っている。
「メル、止めろ」
　ヴェルが肩を掴んでくる。その顔を見ると、何故か数歩あとずさった。
　その時、キバオウから決闘の申請が来た。わたしは即効で承認し、カウントダウンが始まる。ルールは初撃決着モードだ。
　怒りに支配されながらも、わたしのスタイルは変わらない。右手に槍を持ち、左足を前に、重心は平常。視線は正面に添え、槍先は地面を向いている。これがわたしの対人戦のスタイルだ。
　カウントがゼロになると同時に肉薄し、猛攻する。防御は考えない。むしろ攻撃する隙を与えない。
　一発目がクリーンヒットする。そこから畳み掛けるように連撃を加えていく。
　しばらく攻撃して、システム障害に気付く。いつの間に決着がついていたんだろうか。いや、単に気付かなかっただけだろう。
　キバオウをボッコボコにして、謝罪させたわたしはいつものようにヴェルの隣に座る。
「……どうしたの？　顔色悪いよ？」
　わたしがヴェルに問い掛けると、震えながら答えた。
「さっきメルに睨まれた時、俺まで殺されるかと思った……」
「まっさかぁ」
　確かにちょっとキレてたけど、そこまでではなかったと思う。
「いや、あの時のメルの目は餓えた獣のと一緒だった」
「ぶぅ、それ言い過ぎじゃない？」
「断じてない」

ヴェルの言葉がいまいち信じられない。頬を膨らませて拗ねていると、頭を撫でられる。それで機嫌が直ってしまうわたしもどうかと思うが。

会議の話題は再びキバオウの発言に戻る。すると褐色の肌にスキンヘッドという厳つい外見のエギルがバリトンの声でキバオウを論破した。

ちなみに肉体的にも精神的にもボッコボコにされたキバオウは真っ白に燃え尽きていた。

「ディアベルさん！　鼠の攻略本、ボス編出てた！」

劇場に駆け込んできたプレイヤーの言葉にざわめきが起こる。

ディアベルがそれを受け取り、開いて内容を確認する。

「ボスの名前、推定ＨＰ、ソードスキル、取り巻きＭｏｂ。さすがの情報量だな。見た感じ、ヤバそうな数値じゃない。いけるぞ！」

「ちょお待て！」

いつの間にか復活したキバオウが叫んでいた。

「このデータはβテスト時のものですやとぉ……!?　やっぱりアイツ、誰がβテスターか知っとるんや！　いや、あの鼠女自信がβテスターに違いない！」

キバオウの言葉に、周りに同意が広まっていく。

「今は、感謝以外の何をするの？」

そう言ったのはフードで顔を隠した女性プレイヤーだった。てかわたし以外にもここに女性プレイヤーいたんだ。

「そうだ！　俺達の敵はβテスターじゃない！　フロアボスだ！」

ディアベルが叫ぶ。それで一気に空気が変わる。

「俺達はフロアボスに勝って、始まりの街で待ってる皆に証明するんだ！　このゲームはクリア出来るんだと！

もちろん死者は一人も出させない。騎士の、誇りに懸けて」

空気が一つになる。ディアベルには皆をまとめるカリスマ性がある。これからもずっと、皆を率いて攻略を進めていくのだろう。

「じゃあ皆、自由にパーティを組んでくれ！」

ディアベルの掛け声と共に次々とパーティが出来ていく。が、わた

し達には一切声がかからない。元々仲間なのだとしたら、むしろ少人数でここまで来たわたし達の方が珍しいのかもしれない。
もしかすると、さっきキバオウをボッコボコにしたせいで恐がられているとか？
いやいや、そんなことはないハズ。だってわたしは、自信を「小動物のようなもの」と自負しているのだから。
「なぁ、アンタらもあぶれたのか？」
声を掛けてきたのはキリトだった。後ろにはさっき見たフードの女性プレイヤーがいる。
「あぁ。もしよかったら仲間に入れてくれ」
ヴェルの返答に、キリトは応える。わたし達はキリトのパーティに参加することになった。
新たに加わったＨＰゲージが二本。それと《Ｋｉｒｉｔｏ》と《Ａｓｕｎａ》という名前。これはキリトとアスナで間違いない。
ディアベルが歩いてくる。
「君達は四人パーティか？　申し訳ない！　取り巻きＭｏｂ専門のサポートで構わないだろうか」
来るなり、頭を下げてそう言った。
「いや、取り巻きといってもおざなりに出来ないし、重要な役目だよ」
キリトがそう言うと、ディアベルは胸を撫で下ろした。
「そう言ってもらえて助かるよ。それに、お姫様が二人もいるなんて羨ましいよ」
「メルは渡さんぞディアベルッ！」
ヴェルに抱き寄せられる。やだ、カッコイイ……と、のろけるのはこの辺までにしておこう。
ディアベルが去ってから、アスナが背を向けて劇場を去っていく。
「どうしたの？」
わたしが問うと、アスナは歩みを止めず呻くように言った。
「取り巻き専門の、それもサポートですって？　戦力外ならそう言えばいいじゃない」
それを聞いていたキリトが言う。

「いや、やっぱり人数多い方がスイッチでＰＯＴローテするにも安定するし」
　アスナが立ち止まる。そして恐る恐る、といった様子で振り返り、パーティプレイとしては致命的なそれを呟く。
「すいっち……ぽっと……？　って、何？」
「よし、分かった。明日はパーティプレイについてレクチャーしよう。練習用にいいクエストがあるんだけど、朝限定なんだ。出来れば今から酒場辺りで説明したんだけど……」
「わたしはかまわないよ」
「俺も」
　三人でアスナを見つめる。
「分かったわよ、行けばいいんでしょう？」
　少々毒のある言い方だが、合意を得られたならよしとしよう。
　近くの酒場に入り、四人で席に座る。性別を考慮してか、わたしがアスナの隣に座る。
「細剣使い（フェンサー）さんはパーティ組んだことないってことでオーケー？」
　キリトの言葉にアスナが頷く。
「メルトアとヴェルカ、だったか。二人はずっとコンビなのか？」
「初日の夜からずっと一緒にいるから、俺達はパーティプレイについては一通り理解しているつもりだ」
　キリトが頷いて、言う。
「ならまず二人にお手本として何度か戦闘してもらって、そのあと俺と細剣使い（フェンサー）さんで何度か実践しよう。一度見てからやった方が、理解しやすいと思うんだが、どうだろう」
「……問題ない」
　アスナが答える。
「もういいでしょ？　失礼するわ」
　アスナが立ち上がり、酒場を出ようとする。
　わたしは素早くウィンドウを操作し、アスナにフレンド申請をする。だって、女性プレイヤー同士、仲良くしたいし。

アスナがわたしを見てくる。それに満面の笑みでもって応える。
しばらくして、アスナがフレンドに追加された。
「俺は明日に備えて宿に帰るけど、二人はどうする？」
キリトの問いに、わたしは少し考えて問いで返す。
「キリトってどんなところに泊まってるの？」
「うん？　農家の二階を丸々借りてるんだ。おかげてかなり広いし、牛乳も飲み放題なんだぜ。あと滅多に使わないけど風呂もついてる」
なんと。この世界に来て一度も目にしなかったお風呂。入りたい。とりあえずアスナに連絡してみよう。
「キリト、わたしお風呂入りたい」
「えっ。いや、まぁ、いいんだけど……」
そんな時だ。アスナが酒場に舞い戻ってきたのは。
「何か忘れ物？」
アスナの代わりに、わたしが答える。
「アスナも誘ったの。いいでしょ？」
二人でキリトを見つめる。
「分かった、分かったよ」
押し切られたキリトが返事したのを聞いてアスナと二人でガッツポーズをした。

＊

キリトの宿に着いたのはもう日が暮れてからだった。
「うわぁ、広い」
四人が入ってもまだまだ余りある広さを誇っている。そしてバスルームと書かれたプレートと扉を見つけると、アスナの手を引く。
「え、一緒に入るの？」
「女の子同士だからいいじゃない」
アスナを連れて、風呂場に入る。扉を閉める前に、顔だけだして言う。
「ヴェル、キリトを見張っててね」

「任せとけ」
扉を閉める。
ウィンドウを操作して、装備品を全解除し、湯船に飛び込む。
アスナも装備を解除して、湯船に入ってきた。
「はふぅ……」
二人から情けない声が漏れる。
「なんだか、生きてるって感じがする」
アスナが呟く。
「そうだね。今は、この世界に生きてる」
しばらく沈黙する。
「君は、強いね。わたしなんて、恐いのよ……自分が自分でなくなりそうで」
アスナの顔を、今にも泣き出しそうだ。
「そんな簡単に自分は変わらないよ。それに、わたしはアスナが思うほど強くない。今日だってあの黒いのに負けて泣いてたんだよ？
たぶん、ヴェルのおかげ。わたしはヴェルがいるから強いふりをしていられる。アスナも、誰か見つければいいんじゃないかな？　心を預けられる、大切な誰かを……」
「……、」
アスナがうつむく。それがなんだか嫌だった。
「それっ」
顔にお湯をかけてみた。
「わぷ、やったわね！」
「うぷ、負けるか！」
そこからお湯かけ合戦が始まる。一分ほどかけ合って、
「フフフッ」
「アハハ。あー、面白かった。アスナも初めて笑ったね」
「そ、そう？」
「そうだよ」
そこで思い出したようにアスナが言う。
「そう言えばわたし、あなたの名前知らない」

「わたしはメルトア。メルって呼んで」
「よろしくね、メル」
顔を見合わせたまま、二人して笑った。

失策

メルとアスナが風呂場に消えてから、俺はキリトと向かい合って牛乳を飲んでいた。
何が楽しくて野郎同士で牛乳を飲んでいるのだろう。俺が聞きたいわ。
「そういや、メルに勝ったんだってな」
「……あぁ、強かったよ、彼女は」
正直なところ、未だにキリトがメルに勝ったということが信じられなかった。見た目からして強そうじゃない。いや、それならメルのほうがそうだが。
「ただ俺と違うのは、彼女の強さは現実を伴ってるってことだな」
キリトの言葉に、俺は答える。
「何かまでは分からんが、世界大会で優勝したって聞いたぞ」
「世界大会⁉　そうか、そりゃ強いわけだ」
キリトはメルと違って現実ではさほど強くないと見た。故にその強さはゲームの中だけの話だが、それでもメルに勝つなら相当な実力がなければならない。
恐らくキリトは、仮想空間、いや、ＶＲＭＭＯであるＳＡＯ自体に慣れている。故に導き出される可能性は一つ。
「キリト、お前βテスターか？」
俺は例の友人から、キリトというプレイヤーの名前を聞いたことがあった。その確証もあって言ったわけだ。
「友達にβテスターがいてな。聞いたんだよ。フルダイブ酔いする奴なんだけど」
「……そういえばいたな、酔ってる奴」
その台詞は、キリトが自身をβテスターと認めた証だ。
「二人はリアルでも知り合いなのか？　いや、マナー違反なのは分かってるけど、気になって」
「気にするな。俺達は初日の夜に初めて会ったんだよ」

まぁ、今思えばかなり滅茶苦茶だった気もしなくもない。
と、その時だ。外に繋がる方の扉がノックされた。しかもリズム良く『コン、コココン』と。
「やべ……！　アルゴだ」
慌てているキリトに対し、俺は割と冷静だった。
風呂場の扉にもたれ掛かり、言う。
「行ってくれ」
「分かった」
キリトが扉を開ける。
「アンタが来るなんて珍しいな」
「ヤッ、キー坊。それになんでヴェル坊までいるんダ？」
どこかで聞いたことのあるようなイントネーションの呼び名に耐えながら、俺は答える。
「なんでって、風呂上がりに牛乳飲んでるだけだが？」
「ふーン、メルっちとアーちゃんはどうしたんダ？　同じパーティだロ？」
「今頃どっちかの宿でガールズトーク中じゃねぇの？」
適当に答えて、牛乳を飲む。
「この間の件だろ？　で、今回は幾ら積んできたんだ？」
「そうダ。さらに値段を上げて、三万九千八百コル出すそうダ」
「サンキュッパ？　何がだ」
するとキリトが答えた。
「俺の剣が欲しいんだと。でもさ、それだけ払えるなら、俺の剣と同じのが一本作れるぞ？」
「先方には何度もそういったんだがナ。聞く耳を持たないんダ」
するとキリトが、依頼人の名前に千五百コル出すと言う。アルゴが依頼人に確認するためメールを送ると、わりとすぐに返事が返ってきた。
「教えてかまわないそーダ。もっとも、あれだけ派手に暴れて派手にやられたからナ」
派手に暴れて派手にやられた奴、と言われるとあのサボテンもとい

も〇っとボール頭のキバオウしか思い付かない。
「キバオウか」
キリトの言葉にアルゴが頷く。
「交渉は決裂でいいんだナ？　キー坊」
「あぁ」
と、その時だ。俺の背後から女二人分の笑い声が聞こえてきたのは。
「うン？　なんだ今ノ」
「ポルターガイストとかじゃないかな、ラップ現象的な！」
「そんな機能実装されてたカ……？　まぁいいカ。オレっちはそろそろ帰るヨ」
アルゴが席を立つ。そのまま俺の前を通り過ぎ、アルゴの手が高速で動いたかと思うと、俺の体が後方に……つまり風呂場の中に倒れこむ。風呂場の扉が内開きだったのだ。扉にもたれていた俺は当然の如く風呂場に倒れこむしかない。自分の失敗に気付きながら、俺は二人がもう服を着ていることを祈って床に背を打ち付けた。
右手で頭を擦りながら、そっと振り返った。
メルとアスナは下着姿だった。ギリギリ……セーフ？　いや、なんで牛乳がかかってるんだ？
現状を理解できていなかった二人も、やがて状況を理解し始めた。その表情が羞恥と怒りに染まっていく。
ひゅっ、と音がして、アスナが消える。背後からものすごい音がして、振り向くとキリトが気絶していた。圏内ではダメージを受けないので、当たり所が悪かったのだろう。
「もう……」
そこで俺は、目を覆うなりして視界をなくすべきだったと悟る。
「ヴェルのバカーーッ！」
俺の意識は、そこで途切れた。